

病害虫発生予察情報

- 1 令和 8 年度 病害虫発生予察 予報第 3 号 (6 月)
- 2 気象情報 九州北部地方 1 か月予報 (福岡管区气象台)
 气象台メモ (大分地方气象台)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

◎予報内容の概況

作物	病害虫名	発生面積		発生量		ページ数
		平年並	前年並	平年並	前年並	
水 稲	いもち病(葉)	平年並	前年並	平年並	前年並	P.2
	イネミズゾウムシ	やや多い	多い	やや多い	多い	P.2
温州ミカン	そうか病	平年並	少ない	平年並	やや多い	P.3
	黒点病	平年並	前年並	平年並	前年並	P.3
	ミカンハダニ	やや多い	多い	平年並	多い	P.4
カボス	かいよう病	平年並	多い	平年並	多い	P.4
	黒点病	平年並	前年並	平年並	前年並	P.4
	ミカンハダニ	やや少ない	前年並	平年並	前年並	P.5
ブドウ	べと病	平年並	前年並	平年並	前年並	P.5
ナシ	黒星病	平年並	前年並	平年並	前年並	P.6
果樹共通	果樹カメムシ類	やや多い	やや多い	多い	やや多い	P.6
夏秋トマト	すすかび病	平年並	前年並	平年並	前年並	-
	灰色かび病	平年並	前年並	平年並	前年並	-
	コナジラミ類	平年並	前年並	平年並	前年並	P.7
	ハモグリバエ	平年並	前年並	平年並	前年並	-
夏秋ピーマン	斑点病	平年並	少ない	やや少ない	少ない	P.8
	アザミウマ類	やや少ない	少ない	やや少ない	やや少ない	P.9
	アブラムシ類	平年並	前年並	やや少ない	やや少ない	P.10
白ネギ (平坦地)	べと病	多い	多い	多い	多い	P.11
	ネギアザミウマ	多い	多い	やや多い	多い	P.12
	ネギハモグリバエ	やや少ない	少ない	平年並	やや少ない	P.13
白ネギ (中山間地)	ネギアザミウマ	平年並	多い	やや多い	多い	-
	ネギハモグリバエ	やや少ない	やや少ない	平年並	前年並	-

◎注意事項 上記一覧表病害虫のゴシック体のみ以下に個別の記述をしています。

- ◎特記事項 令和 8 年度病害虫防除技術情報第 1 号(果樹全般 果樹カメムシ) : 令和 8 年 5 月 19 日
 令和 8 年度病害虫発生予察注意報第 2 号 (ネギ べと病) : 令和 8 年 5 月 21 日
 令和 8 年度病害虫防除技術情報第 2 号 (ネギ類ネギアザミウマ) : 令和 8 年 6 月 1 日

水稻

1 いもち病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 早期水稻における5月中旬の巡回調査では、発生は認められず、発生圃場率、平均発病度ともに平年並であった。

発生圃場率：本年 0%（平年 0%、前年 0%）

平均発病度：本年 0（平年 0、前年 0）

イ 本病は多湿条件により発生が助長される。降水量は、平年並 40%、多い確率 40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項


ア 早期発見に努める。特にいもち病予防のための苗箱施薬を実施していない圃場では注意が必要である。

イ 育苗中にいもち病が発生しているか否かに十分注意し、発生を認めた場合は直ちに液剤による防除を行い、本田に持ち込まないようにする。

ウ 圃場をよく観察し、いもち病の発生を認めた圃場では、直ちに薬剤による防除を実施する。

エ 本田に置かれた補植用の苗や放置された余り苗は本病の伝染源となるので、速やかに取り除く。

オ 今後移植を行う圃場では、粒剤による苗箱施薬を必ず実施する。

カ 水稻いもち病防除に対する QoI 剤（ストロビルリン系殺菌剤）については、令和4年度に本剤耐性菌の発生が確認されているため、引き続き耐性菌の再発や拡散を防ぐことが重要である。そこで、やむを得ず水稻（WC Sも含む）に使用する場合は、「水稻に QoI 剤を使用する場合の対応マニュアル（平成28年11月10日付地域農業振興課、JA 全農おいた公表（URL：https://www.pref.oita.jp/uploaded/life/2213301_4504493_misc.pdf））」 に準じた使用をお願いします。

2 イネミズゾウムシ

(1) 予報内容

発生面積：やや多い

発生量：やや多い

(2) 予報根拠

ア 早期水稻における5月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高く、平均被害度は平年よりやや高かった。

発生圃場率：本年 66.7%（平年 40.8%、前年 30.0%）

平均被害度：本年 6.4（平年 4.8、前年 0.5）

(3) 防除上注意すべき事項

- ア これから移植を行う地域では、他の病害虫と併せて効率的に防除できる苗箱施薬を実施し、生育初期の被害防止に努める。
- イ すでに移植を終えた水田では、成虫の本田への侵入に注意し、1株当たり0.5頭以上の発生を認めた時は早めに本田防除を実施する。
- ウ 直播き等により箱施薬での対応が難しい場合、種籾への直接処理剤を用いるか本田への薬剤散布を実施する。
- エ 産卵は水中の葉鞘部に行われるので、産卵抑制のため活着後は深水管理を避ける。

カンキツ（温州ミカン）

1 そうか病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

- ア 5月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並、平均発病葉率は平年よりやや高く、平均発病度は平年より高かった。
 - 発生圃場率：本年 10.0%（平年 10.1%、前年 20.0%）
 - 平均発病葉率：本年 1.6%（平年 1.1%、前年 1.3%）
 - 平均発病度：本年 0.6（平年 0.3、前年 0.3）
- イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並40%、多い確率40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 幼果への初期感染防止のため、防除を行う。

2 黒点病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

- ア 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並40%、多い確率40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 定期的な予防散布を徹底する（降雨量200～250mmごと）。ただし、降雨が少ない場合でも1ヶ月に1回予防散布する。
- イ 伝染源である剪定くずの処理及び枯れ枝の剪定除去に務める。

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生面積：やや多い

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 5月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均寄生葉率ともに平年より高かった。

発生圃場率：本年 50.0%（平年 29.2%、前年 10.0%）

平均寄生葉率：本年 7.7%（平年 3.1%、前年 0.2%）

イ 本虫は高温乾燥により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 20%、高い確率 70%、降水量は、少ない確率 20%、平年並 40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 寄生密度の高い圃場では抵抗性の心配のないマシン油乳剤で防除する。

イ 抵抗性の出現を回避するため、同一系統の薬剤は年1回の使用とする。

カンキツ（カボス）

1 かいよう病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 5月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均発病葉率は平年より高く、平均発病度は平年よりやや高かった。

発生圃場率：本年 11.1%（平年 1.1%、前年 0%）

平均発病葉率：本年 2.0%（平年 0.5%、前年 0%）

平均発病度：本年 0.4（平年 0.3、前年 0.0）

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並 40%、多い確率 40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨期の予防散布を徹底する。

イ 罹病枝葉の剪除徹底に努める。

2 黒点病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並 40%、多い確率 40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

温州ミカンの項を参照

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 5月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均寄生葉率ともに平年より低かった。

発生圃場率：本年 0% (平年 27.1%、前年 0%)

平均寄生葉率：本年 0.1% (平年 3.5%、前年 0%)

イ 本虫は高温乾燥により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 20%、高い確率 70%、降水量は、少ない確率 20%、平年並 40%と予想されている(気象情報参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

温州ミカンの項を参照

ブドウ

1 ベと病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 5月中旬の巡回調査では、発生は確認されず、発生圃場率、平均発病葉率ともに平年並であった。

発生圃場率：本年 0% (平年 0%、前年 0%)

平均発病葉率：本年 0% (平年 0%、前年 0%)

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並 40%、多い確率 40%と予想されている(気象情報参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病すると防除が困難となるので発病状況に注意し、早めの予防散布を徹底する。

ナシ

1 黒星病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 5月中旬の巡回調査では、葉の発生圃場率、平均発病葉率ともに平年より低かった。

また、果実の発生圃場率、平均発病果率ともに平年より低かった。

(葉) 発生圃場率：本年 0% (平年 7.8%、前年 0%)

平均発病葉率：本年 0% (平年 0.3%、前年 0%)

(果実) 発生圃場率：本年 0% (平年 1.9%、前年 0%)

平均発病果率：本年 0% (平年 0.1%、前年 0%)

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並40%、多い確率40%と予想されている(気象情報参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 幸水、豊水は本病に弱いので予防散布を徹底し、かけもれのないよう十分量を散布する。

イ FRACコード「3」(DMI系薬剤)は連用すると耐性菌が出現しやすいので、年3回までの使用とする。



果樹共通 (令和8年5月19日 病虫害防除技術情報 第1号発表)

1 果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)

(1) 予報内容

発生面積：やや多い

発生量：多い

(2) 予報根拠

ア 各地点のフェロモントラップにおける果樹カメムシ類の誘殺数は平年よりやや多く推移している。

(3) 防除上注意すべき事項

ア カメムシ類の園内への飛来は地域や園地により大きく異なるので、園内外をこまめに見回り早期発見に努めるとともに、地域で一斉防除を行うと防除効果が高い。

イ IRACコード「3A」(合成ピレスロイド系殺虫剤)の多用は、天敵等への影響が大きく、ハダニ類の発生を助長するので最小限の使用にとどめる。

夏秋トマト

1 コナジラミ類

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 5月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均株当虫数ともに平年並であった。

発生圃場率：0%（平年：0%、前年：0%）

平均株当虫数：0.0頭（平年：0.0頭、前年：0頭）

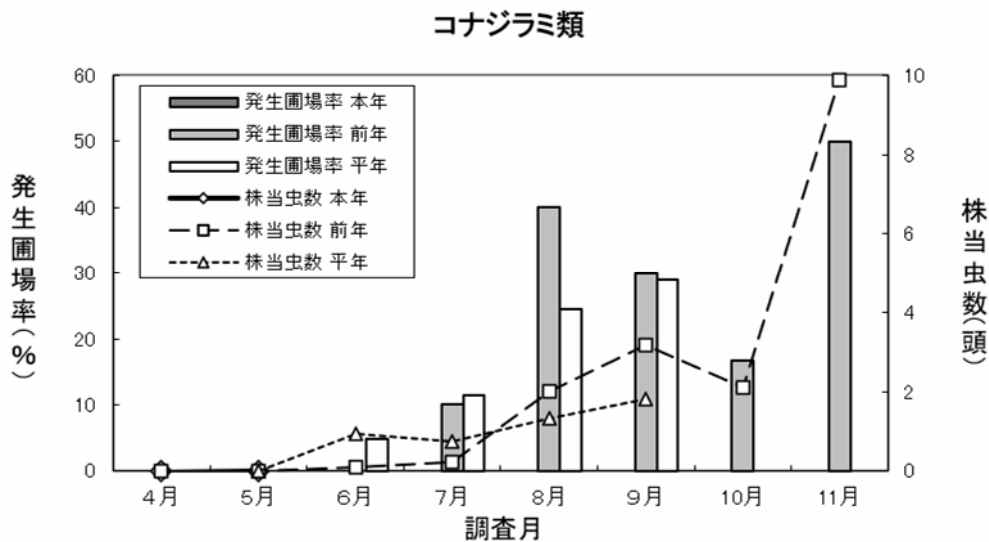
イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率20%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫は葉裏に寄生して吸汁加害し繁殖も旺盛なため、早期発見に努め発生を認めたら直ちに防除を行う。

イ オンシツコナジラミは多種の雑草を介して定植初期から圃場内に侵入するため、生育初期から定期的に防除を実施する。

ウ タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）を、またコナジラミ類はトマトクロロシスウイルス（ToCV）を媒介するため、粒剤による初期防除及び生育期の薬剤散布を徹底するとともに、防虫ネットなどを使用してハウス内への侵入を阻止する。



夏秋ピーマン

1 斑点病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 5月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均発病葉率ともに平年より低かった。ただし、調査を行った9圃場中5圃場で微発生であった。

発生圃場率：0%（平年：9.1%、前年：33.3%）

平均発病葉率：0.0%（平年：0.5%、前年：3.9%）

イ 本病は多湿条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並40%、多い確率40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 一旦発生すると防除が困難になるので早期発見に努め、防除は予防散布や初期散布に重点を置くとともに葉裏に十分薬剤がかかるようにする。

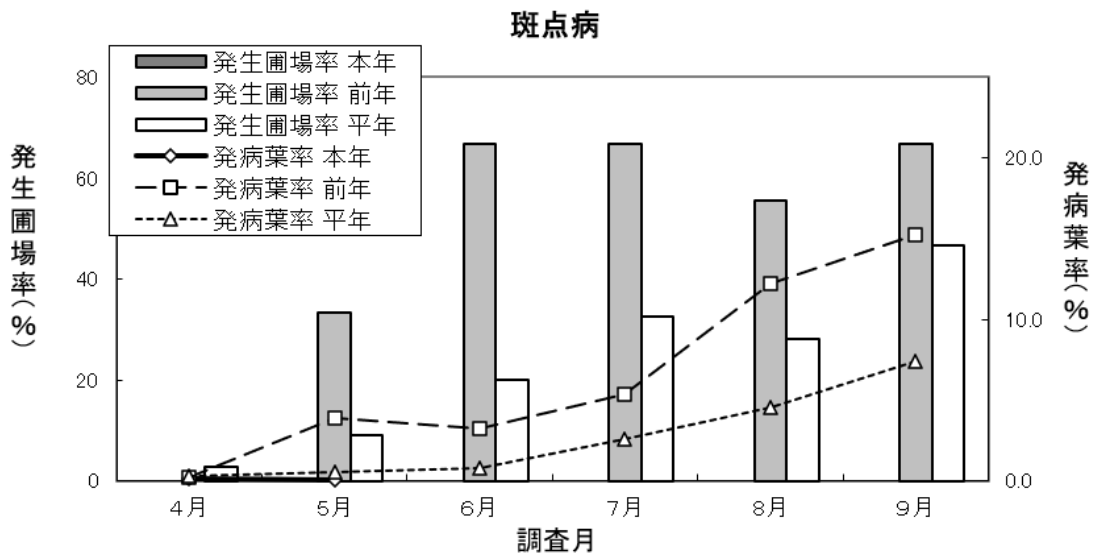
イ 発病初期のうちに治療効果が高い薬剤を中心に、散布間隔を短くする等して集中的に散布する。

ウ FRACコード「3」（EBI系薬剤）は連用すると耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。

エ 高湿度が発生を助長するので施設では換気に努める。

オ 本病の被害により落葉した発病葉はできるだけこまめに圃場外へ持ち出して処分する。

カ 窒素不足等により株の樹勢が低下すると発病を助長するため、肥培管理に注意し、樹勢を維持するように心がける。



2 アザミウマ類

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 5月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均寄生花率はともに平年より低かった。

発生圃場率：0%（平年：20.6%、前年：50.0%）

平均寄生花率：0%（平年：1.8%、前年：2.0%）

イ 本病は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率20%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

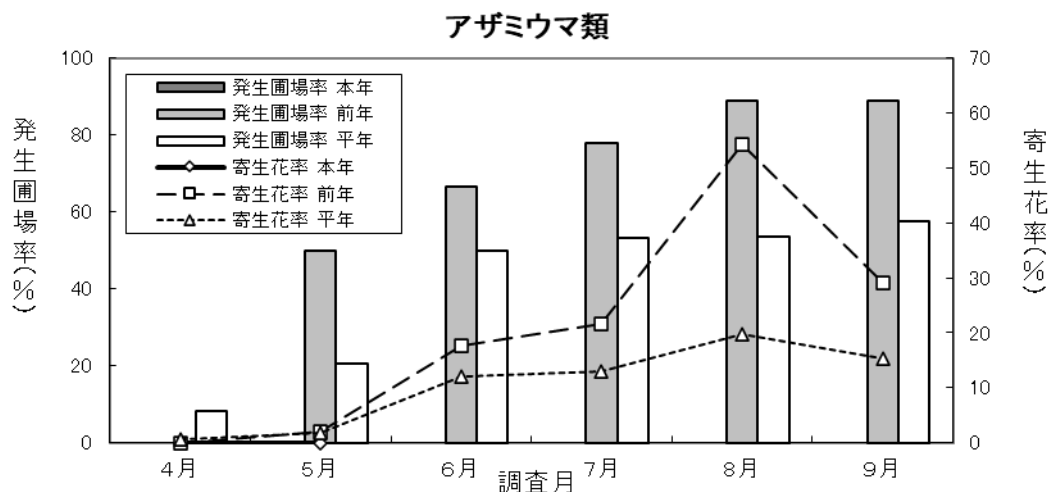
ア 本虫は葉裏、花卉、がくの内側等に潜み繁殖も旺盛なため、早期発見に努め低密度のうちに薬剤が植物体に十分かかるように防除を行う。

イ 本虫は多種の雑草にも寄生し増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

ウ 本虫は青色に誘引されるため、青色粘着トラップ等を設置し、発生状況の把握に努める。

エ ミカンキイロアザミウマは各種薬剤の感受性が低下しており、ピーマン黄化えそ病(TSWV)及びピーマンえそ輪点病(CSNV)を媒介するので発生に注意し、初期防除を徹底する。

オ ヒラズハナアザミウマは各種薬剤の感受性が低下しており、ピーマン黄化えそ病ウイルス(TSWV)を媒介するので発生に注意し初期防除を徹底する。



3 アブラムシ類

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 5月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高く、平均50芯虫数は平年より低かった。

発生圃場率：11.1%（平年：9.0%、前年：11.1%）

平均50芯虫数：0.3頭（平年：1.1頭、前年：4.8頭）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率20%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

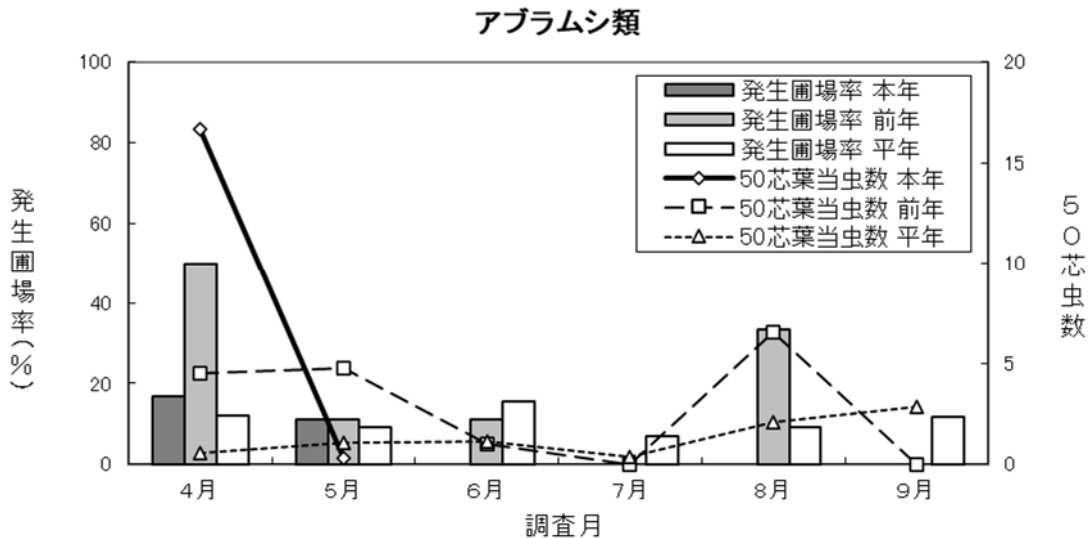
ア 本虫の成育は早く、急速に密度が高まる。また、高密度になると排泄物にすす病が発生し、果実が汚れるため低密度のうちに防除を行う。

イ 成幼虫は新芽、花卉等を吸汁加害し繁殖も旺盛なため、早期発見に努める。

ウ ワタアブラムシは、IRACコード「4A」（ネオニコチノイド系薬剤）に対して感受性の低下が確認されている。

エ 同一系統薬剤を連続使用しないようにし、他系統薬剤とのローテーション（輪番）使用を行う。

オ 本虫は、モザイク病（CMV、PVY、BBWV）を媒介するので発生に注意し、初期防除を徹底する。





1 ベと病

(1) 予報内容

発生面積：多い

発生量：多い

(2) 予報根拠

ア 5月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均発病株率ともに平年より高かった。

発生圃場率：87.5% (平年：45.0%、前年：37.5%)

平均発病株率：33.0% (平年：11.5%、前年：15.5%)

イ 本病は気温13~20°Cで湿度が高い場合に発病しやすいが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、低い確率10%、平年並20%、降水量は、平年並40%、多い確率40%と予想されている(気象情報参照)。

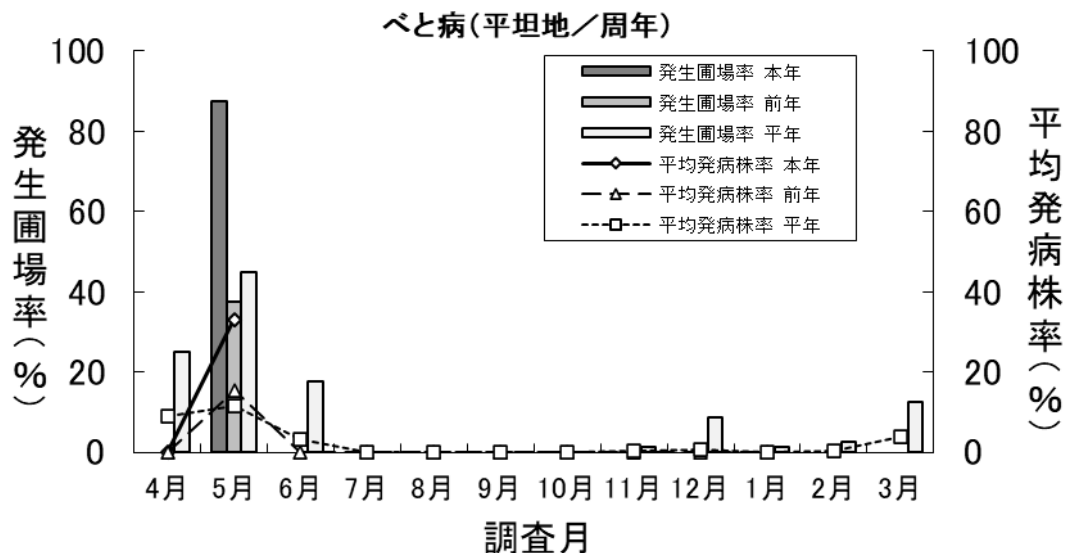
ウ 中間地の圃場を対象とした5月中旬の巡回調査では、平均発病株率20.0% (平年7.2%)と平年より高かった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後の防除は効果が劣るため、気象情報を参考に発病前から防除を行う。

イ この時期の散布は、曇雨天日や夕方を避け、できるだけ晴天日の日中に行う。

ウ 同一系統薬剤を連続使用しないようにし、他系統薬剤とのローテーション(輪番)使用を行う。



2 ネギアザミウマ (令和8年6月1日病害虫防除技術情報第2号発表)



(1) 予報内容

発生面積：多い

発生量：やや多い

(2) 予報根拠

ア 5月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高く、平均被害度は平年並であった。

発生圃場率：100% (平年：82.5%、前年：37.5%)

平均被害度：14.8 (平年：15.3、前年：2.5)

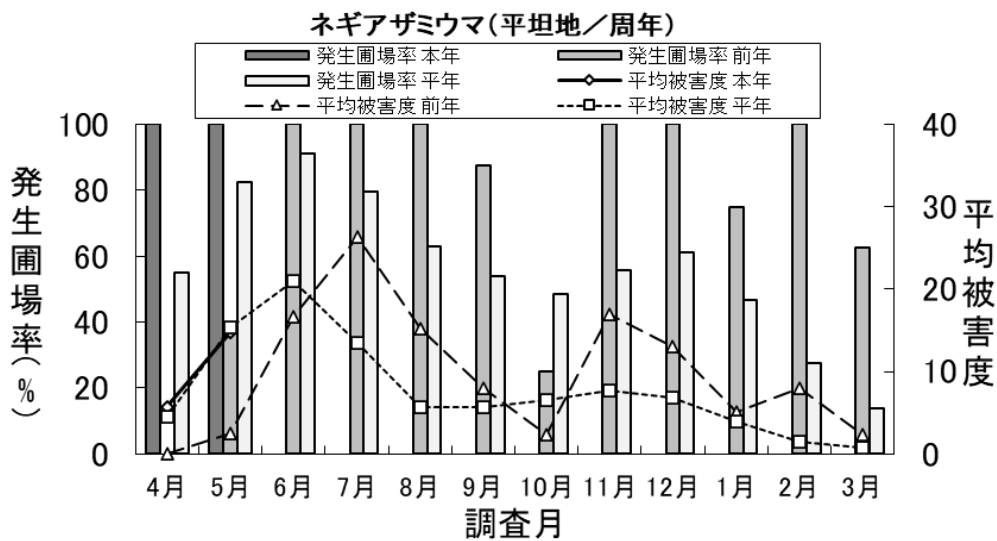
イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率20%、平年並40%と予想されている(気象情報参照)。

ウ 中間地の圃場を対象とした5月中旬の巡回調査では、平均被害度5.7(平年6.5)と平年並であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 周辺雑草が発生源となりやすいので、圃場内外の除草を徹底する。

イ 本虫の増殖力は高く、寄生密度が上昇してからでは防除が困難であるので、早期発見に努め、防除を行う。



3 ネギハモグリバエ

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 5月中旬の巡回調査では、微発生が2圃場で確認され、発生圃場率、平均被害度ともに平年より低かった。

発生圃場率：0%（平年：45.0%、前年：25.0%）

平均被害度：0.1（平年：1.8、前年：1.3）

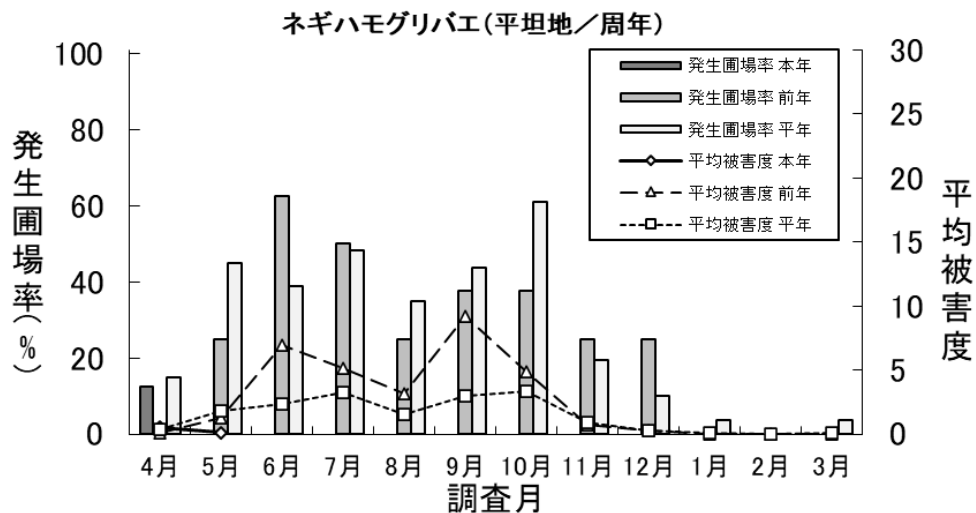
イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率20%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 2020年に北部・豊肥地域において新たに確認されたネギハモグリバエ別系統（B系統）は従来系統と比較し1葉あたりの寄生虫数が多く、葉が白化するほど激しく食害する。両系統は形態での識別が困難なため、系統に関わらず早期発見に努め、ネギハモグリバエまたはハモグリバエ類に適用のある薬剤を用い発生初期の防除を徹底する。

イ 被害葉及び収穫残渣は本虫の発生源となるので、圃場に放置せず1か所にまとめて積み上げ、ビニールで覆い裾部分を土で埋める等適切に処分する。

ウ 同一系統薬剤を連続使用しないようにし、他系統薬剤とのローテーション（輪番）使用を行う。



※薬剤の詳細は大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針、又は各地区防除暦を参照する

気象台メモ

大分地方気象台

◎ 九州北部地方（山口県を含む）1か月予報（福岡管区気象台発表）

- ・発表：令和8年5月21日（毎週木曜日に発表）
- ・予報期間：令和8年5月23日～令和8年6月22日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。向こう1か月の降水量は平年並か多い見込みです。

平均気温は、高い確率70%です。降水量は、平年並と平年より多い確率が40%です。日照時間は、少ない確率40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率が80%です。2週目は、高い確率が50%です。3～4週目は、高い確率60%です。

【向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）】

要素	予報対象地域	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	九州北部地方（山口県を含む）	10	20	70
降水量	九州北部地方（山口県を含む）	20	40	40
日照時間	九州北部地方（山口県を含む）	40	30	30

◎ 九州北部地方（山口県を含む）3か月予報（福岡管区気象台発表）

- ・発表：令和8年5月19日
- ・予報期間：令和8年6月～令和8年8月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平均気温は、高い確率70%です。降水量は、平年より多い確率が40%です。

6月 平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、高い確率60%です。降水量は、平年より多い確率が40%です。

7月 期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多く、期間の後半は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率60%です。

8月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率60%です。

【向こう3か月の気温、降水量の各階級】

3か月	気温：高い	降水量：ほぼ平年並
6月	気温：高い	降水量：ほぼ平年並
7月	気温：高い	降水量：ほぼ平年並
8月	気温：高い	降水量：ほぼ平年並

【向こう3か月の気温の各階級の確率（%）】

気温	予報対象地域	低い	平年並	高い
3か月	九州北部地方（山口県を含む）	10	20	70
6月	九州北部地方（山口県を含む）	10	30	60
7月	九州北部地方（山口県を含む）	10	30	60
8月	九州北部地方（山口県を含む）	10	30	60

【向こう3か月の降水量の各階級の確率（%）】

降水量	予報対象地域	少ない	平年並	多い
3か月	九州北部地方（山口県を含む）	30	30	40
6月	九州北部地方（山口県を含む）	30	30	40
7月	九州北部地方（山口県を含む）	30	40	30
8月	九州北部地方（山口県を含む）	30	40	30

◎ 最近1か月の天候経過（令和8年4月下旬から令和8年5月中旬の天候）

4月下旬（多雨）（寡照）

天気は、高気圧に覆われて晴れる日もあったが、低気圧や前線、気圧の谷や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多かった。気温は、平年並か低かった。降水量は、平年よりかなり多かった（多雨）。日照時間は、平年よりかなり少なかった（寡照）。

26日は宇目で「日降水量」の4月の1位の値を更新した。

※大分市の旬平均気温は16.2℃で平年並だった。旬降水量は155.0ミリで平年よりかなり多かった。旬日照時間は35.9時間で平年より少なかった。

5月上旬

天気は、高気圧に覆われて晴れる日が多かったが、低気圧や前線、気圧の谷の影響を受けて、曇りや雨となる日もあった。気温は平年より低く、降水量は平年並か、平年より少なかった。日照時間は、平年より多かった。

1日は中津、豊後高田で「日最大風速・風向」、中津、院内、竹田で「日最大瞬間風速・風向」の5月の1位の値を更新した。

※大分市の旬平均気温は18.1℃で平年より低かった。旬降水量は13.5ミリで平年より少なかった。旬日照時間は85.5時間で平年より多かった。

5月中旬（高温）（少雨）（多照）

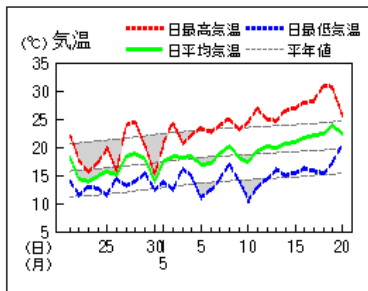
天気は、高気圧に覆われて晴れる日が多く、湿った空気の影響により雨が降る日があった。気温は、平年よりかなり高かった（高温）。降水量は、平年並よりかなり少なかった（少雨）。日照時間は、かなり多かった（多照）。

18日は豊後高田、院内、玖珠で「日最高気温の高い方から」の5月の1位を更新した。

※大分市の旬平均気温は21.4℃で平年よりかなり高かった。旬降水量は6.0ミリで平年より少なかった。旬日照時間は107.0時間で平年よりかなり多かった。

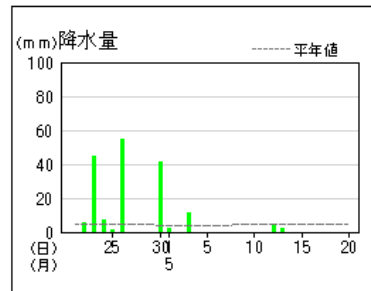
地上気象 気象経過図：2026年04月21日-2026年05月20日

大分



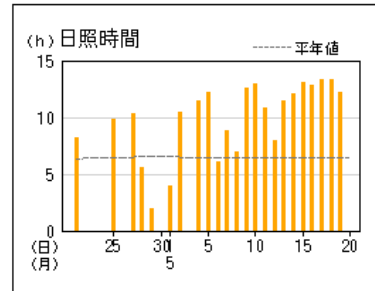
地上気象 気象経過図：2026年04月21日-2026年05月20日

大分



地上気象 気象経過図：2026年04月21日-2026年05月20日

大分



地上気象 気象経過図：2026年4月21日～2026年5月20日

適正防除はホームページで!!

<https://www.pref.oita.jp/site/oita-boujoshou/>

または

病虫害対策チーム

検索



【病虫害発生予察情報作成機関】

農業研究部

病虫害対策チーム

葉根菜類・茶業チーム

果樹グループ

花きグループ

地域農業振興課

安全農業班

大分県農林水産研究指導センター

農業研究部 病虫害対策チーム

〒879-7111 大分県豊後大野市三重町赤嶺 2328-8

Tel. 0974-28-2078

Fax. 0974-22-0940

大分県農林水産部地域農業振興課 安全農業班

〒870-8501 大分県大分市大手町 3-1-1

Tel. 097-506-3661

農薬は正しく安全に使いましょう!!